水底の坂道

ceryeti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水底の坂道

【Ｎコード】
Ｎ０３６０Ｐ

【作者名】
ｃｅｒｙｅｔｉ

【あらすじ】
山道にバスを乗り継ぎ、見覚えのある石のトンネルを抜けると集落に出た。この芦切沢地区と呼ばれる村落は、現在は地図にも載っていない。私はこの地に十三年振りに帰ってきた。少女時代の思い出が残る場所、ここに戻ってきてもなにかするわけではない、人が待っているわけでもない。それでも私は戻ってきた。あの夏の思い出のために……。

深い山中に忘れ去られた村落、芦切沢を舞台とした郷愁の物語。

これは、十三年振りにその地に帰ってきた主人公の、切ない夏の思い出。

第1話（前書き）

作者名は架空の人物です。
主人公がひとり回想する形式の短編です。
◇◆◇◆◇はその切り替わりを表しています。

第1話

「水底の坂道」

諸?寺　明日香　作

＞i14298―1985＜

山道にバスを乗り継ぎ、見覚えのある石のトンネルを抜けると集落に出た。

険しい山々に囲まれ、中央に一本の清流が流れる静かな村落、芦切沢。私は十三年振りにこの地に帰ってきた。

よくまだこんなものが、という感想を都会の者に抱かせる旧式のバスは、ただひとりの乗客だった私を芦切沢バス停で降ろすと先には進まずにUターンをして帰って行った。ガタガタと耳障りな音を立ててバスが去ると、あたりは静寂に包まれた。都会ではうるさいとしか感じない蝉の声も、ここではどこか寂しさを誘う。

山中に忘れ去られた寒村。この芦切沢地区と呼ばれる山深い村落は今では地図にも載っていない。

少女時代の思い出が残る場所……。私は照りつける日差しを避けるようにしてバス停の待合小屋に入り、腰を下ろした――――。

◇◆◇◆◇

「おばあ、ちゃん?」

バスから降りた少女が道の先に向かって言った。後から両親も降りてくる。

「おお雪枝、雪枝や。おばあちゃんだよう。こっちにおいで」
道の向こうからとぼとぼ歩いてくる祖母が、蝉の合唱に混じるような声で私を呼んだ。
「おばあちゃん！」
ガタガタと耳障りな音を立てて先へ進むバスを追いかけるようにして、私は祖母に向かって駆けだした。祖母からは、いつも線香のにおいがした……。

◇◆◇◆◇

小屋からぼんやりと外を眺めていると、そんな光景が目に浮かんできた。十七年前、小学一年の夏、私は初めてこの芦切沢を訪れ、初めて祖母に会ったのだった。
ふうっと一息ついて、小屋を出た。ここは芦切沢の入り口だ。私は舗装されていない道路を村に向かって歩き出した。
私は生まれも育ちも東京だ。帰ってきたというのは正確ではない。この芦切沢には父の実家があったため、毎年夏のお盆時に里帰りをしていたのだった。それは結局小学五年までの五年間だけだったが、小学生になって初めて芦切沢に来た理由は祖父の葬式があったためだったらしい――――。

◇◆◇◆◇

雨が、降っていた。しやしやと霧のように、雨が降っていた。
前の方から抑揚のない読経の声が聞こえてくる。頭の上をガサガサと白い旗差物が揺れている。お経と一緒にもの悲しい鳴り物の音も聞こえてくる。
祖父の野辺送りだった。
小糠雨に煙る夏の道を葬列が進む。道に沿って川のように粛々と進む会葬者たち。雨の中、山のお寺に向かうその列の中に、私はい

た。
祖父には会ったことがなかった。そしてそれが葬式だともそのときはわかっていなかった……。

◇◆◇◆◇

今歩いているこの道を通った十七年前の野辺送り。その光景が一瞬見えた気がした。両親はこの年に祖父が亡くなってようやく初めて、孫である私を連れて里帰りをしたのだった。そしてひとりになった祖母が待つここ芦切沢でその後五年の間、夏の一週間を過ごすことになる。
山へ向かう村の中央の道をそれて、田んぼの畦道に入った。左右の水田の稲は早くも黄色く色付こうとしている。私はふと立ち止まり、背中からリュックを下ろして中から一枚の写真を取りだした。ケースに大切そうにしまわれたその古びた写真には四人の子どもが並んで写っている。同じこの畦道で撮られたものだ。
写真の左側には男の子と女の子が、いかにもいたずらっ子といった風に仲良く肩を組んで写っている。
田嶋好雄と山城岬。好雄はいつものように麦藁帽子を被り、鼻筋には絆創膏を貼っている。岬は虫取り網を片手に持ち、泥んこの顔に満面の笑みを浮かべている。
その隣にはもう二人、倉見朔司と私、能美雪枝が写っている。朔司もいつものように甚平にジーパンというおかしな格好をしている。二人は控えめに手をつないでいるのだが、となりの二人に負けないくらい楽しそうな表情を浮かべている……。
この写真はいつ撮ったものか思い出せない。ただ、四人がそろって写っているのはこの一枚だけなのだ。
同級だった村の仲良し三人組と、夏の一週間だけそこに加わる自分。私は芦切沢に来るのを一年間心待ちにしていたものだった。彼らと過ごした夏は忘れがたい、大切な思い出として胸に刻まれてい

る。楽しかった思い出とは、どうしてこうも輝いて見えるのだろう……。

懐かしさにフッと口の中で笑うと、その四人の思い出を切り取ったただ一枚の写真をリュックにしまい、再び歩き始めた。

祖父の葬式の後、最初に三人と出会ったのもこの畦道でだった。

私はひとり静かに、歩を進めた――――。

◇◆◇◆◇

つづく

第2話

◇◆◇◆◇

「おーい、そこのお前、おーい、おーいってばあ！」
遠くから男の子の声が聞こえた。私はひとりで畦道を歩いていたのだが、声のした方を振り向くと麦藁帽子を被った子がこっちに走ってくるのが見えた。それともう二人、後から遅れてついて来る子の姿も見える。男の子は私の前まで来ると息を弾ませて止まった。鼻筋に絆創膏を貼っている。
「な、なあに？」
私は急に現れた同年代の男の子に驚きながら、おどおどと話しかけた。男の子は弾む息を整えて言った。
「お前か、能美雪枝っていうのは？」
「うん、そ、そうだよ」
小さな声でそう答えると、彼はいたずらっぽく笑って後ろを振り返った。
「岬、朔司、やっぱりこいつだぞう！東京からやってきたってのは。おーい、早く来いよう！」
彼は後から来る男の子と女の子に呼びかけた。片手は手を振っているのだが、もう片方の手は後ろ手に私を指差している。そして素早い動作でもう一度こちらを振り向くと、おどおどする私を珍しいものでも見るように眺めた。
「お前、東京から来たんだよなあ」
「う、うん」
「へえ、遠いんだろ、東京ってさ」
「う、うん」
「ふうん、なんだか幽霊みたいだな、お前。足切女郎みたいだ。おーい二人とも、足切女郎だぞ。東京から足切女郎がやってきたぞう

！」
彼はまた後ろの二人に呼びかけている。
「な、なあに、その足切女郎って？」
私が消え入りそうな声で聞くと、彼はへへん、と鼻の頭をかきながら答えた。
「幽霊さ。お前みたいに真っ白な幽霊のことだよ。全然怖くないやつなんだけどな！」
「え？ゆ、ゆうれい？そんな、う、うっ、グスン……」
それを聞いた私はその場にしゃがみ込んでしくしくと泣き出してしまった。
「ねえ、やめなよ好雄くん、泣かせちゃって」
「好雄って最低。私のことは泣かせらんないのに弱っちい幽霊なら泣かせられるんだ？」
「ダメだよ岬ちゃん、幽霊じゃないよこのひと」
岬と朔司と呼ばれた二人が追いついたらしく、そう言っているのが聞こえた。
「な、なんだよう。オレはなにもしてないぞ。おい雪枝、急に泣き出すなんて卑怯だぞ」
「好雄くん、また女の子を泣かせたっておじいちゃんに言いつけちゃうぞ」
「ちょ、それだけはやめてくれ朔司」
三人が膝を抱えて泣いている私を囲んで話しているのが聞こえてくる。すると不意に、肩に手がおかれるのを感じた。
「雪枝ちゃんごめんね。ほら立って？」
私は手を引かれて立ち上がった。顔を上げると後から来た二人がにこやかにこちらを見ていた。好雄と呼ばれた麦藁帽子の子はふてくされ気味にちらちらとこちらを見ている。
「どうして、名前、知ってるの？」
「それは、じいちゃんから聞いたからだよ。……泣かせて、悪かったな。でも、オレは本当になにもしてないんだからな！」

口をとがらせて好雄が言った。
「もういいよ。好雄くんなんかここにおいて行こう。ほら？」
後から来た朔司という子が私を立たせた手を握ったまま歩き出した。よく見ると彼は昔の人が着る前合わせの服に、下はジーパンというおかしな格好をしていた。
「ほらもう泣くなよ、雪枝」
ついてきた岬という子が急に私のポケットをまさぐりだしたと思うと、中からハンカチを出して私の目元をごしごしとぬぐってくれた。しかしそんな彼女の顔は泥んこで真っ黒だった。
「ああいうのをさ、いけずっていうんだよ。ばあちゃんが言ってた。私より弱いくせにさ」
彼女はにっこりとして言った。泥んこの顔に白い歯がまぶしい。
三人は畦道を進んでいった。
「おーい、待ってくれよう。オレをおいて行くなって！」
後ろから好雄が駆けてくるのが見えた……。

◇◆◇◆◇

つづく

第3話

十七年前、この畦道。これが私と三人との出会いだった。やんちゃ坊主でリーダーの田嶋好雄、おなじくやんちゃ娘で負けず嫌いの山城岬、そして控えめだが勇気がある倉見朔司。その仲良し三人組に私を加えた四人は誰が言うともなく集まって山に川に、村中を駆け回って遊んでいたのだった。

あの頃の私は泣き虫だったな。そう独りごちながら私は畦道を抜けていった。

この場所に帰ってきても彼ら三人に会えるわけではない。知っている人がいるわけでもない。だがそれでも私は帰ってきた。あの頃の、あの夏の思い出のために。

畦道から別の道路に出て、さらに進むと橋が見えてきた。

上臈橋。村の中央を流れる芦川に架かる古い橋だ。

この場所も思い出深い。私は橋の中央まで進み、流れる川面を見下ろした。芦川の水は以前と変わらず穏やかに流れている。その橋の欄干の外側には昔の木造橋だった頃の橋桁を摸した意匠が施されているのだが、その中の中央のひとつが他と比べると明らかに磨り減っているのがわかる。

普通ならそこだけ磨り減るようなことはないのだ。だがこの橋桁には昔からこの橋が出来てからこの方、いや、木造だった頃から多くの子どもがこの上に立ったのだ。そして私も、その多くの子どものひとりだった。

こうしていると怖々と橋桁の上に立ったあの時の自分の姿が、目に浮かんでくるようだ――――。

◇◆◇◆◇

ザッバーン

その音があまりに大きかったのに驚いて、私はアッと頓狂な声を上げた。欄干から見下ろすと波立つ川面から好雄が顔を出すのが見えた。
「好雄くん、平気！？」
私は小さな声を張り上げた。
「なに言ってんだよ。みんなも早く来い。気持ちいいぞ！」
好雄は涼しげに下から手を振っている。すると、不意に後ろからタタタ、と足音がしたと思うと朔司が助走をつけて勢いよく欄干を飛び越えた。
ザッバーン
朔司は好雄の位置を大きく飛び越したところに落ちた後、プハーっと顔を出した。
「やるなあ朔司、いいとこ見せやがって、おうい、次は岬の番だぞう！」
「お、おう！」
好雄の声に岬が威勢よく応えた。しかし見てみると岬は負けん気が強い普段の彼女らしくもなく、おどおどとためらっているようだった。
「どうした岬、怖くなったのかあ？」
「こ、怖くなんか、ない！」
岬はそう言って欄干にそろそろと近づいていった。しかし彼女の脚は震えているのが離れて見ていた私にもわかった。あの強がりの岬が怖がっている……？
私はそれを見るなり卒然彼女を押しのけた。そして有無を言わさずに欄干を越えて橋桁の上に立っていた。下で好雄がうおっ！？と驚く声が聞こえた。
「雪枝、お、お前はいいんだよ、弱虫なんだから。危ないってば！」
好雄がよっぽど調子を狂わされたといった様子で手をばたばたと振っている。「雪枝、よせ！」という岬の声まで後ろから聞こえてくる。

「私、弱虫じゃない！」
私はあらん限りの声で叫んだ。下で好雄がビクッと肩をすくませた。
「ま、まずい朔司、お前、なんとかして雪枝を止めてくれ。オレ、あいつに泣かれたらまたじいちゃんから大目玉だよお」
「大丈夫だよ雪枝ちゃん。大したことないから！初めての時はしっかり鼻をつまむんだよ！」
慌てる好雄の言うことなどどこ吹く風と、朔司が声をかけてくれた。私はそれを聞いて一息に橋桁を蹴った。
ザッバーン
一瞬、大きな音がしたと思うと次の瞬間には水面から顔を出していた。本当にたいしたことはなかった。水の冷たさが心地いい。
「雪枝、平気なのか？」好雄が心配そうにこっちに泳いできた。
「うん、平気。私、弱い虫なんかじゃないもん」
「わ、悪かったよ。お前は弱虫でも弱い虫でもないもんな。やればできるんだ。なあ朔司？」
「ぼく雪枝ちゃんのこと弱虫なんて言ったことないよ。ね、うわ！？」
ザッバーン
朔司が急に上擦った声を上げたと思うと、三人のすぐ横に岬が落ちてきた。
「岬ちゃん、大丈夫！？」
「ゲホゲホ、雪枝、なんだ、お、お前こそ大丈夫なのか？」
「私は平気」
「へえ、み、見直したよ」
「岬ちゃん、全然大丈夫じゃなさそうだよ？」
「よう岬、遅かったじゃないか。てっきり怖じ気づいたのかと思ったぜ？」後ろから好雄が言った。
「だから私は怖がってなんかいない。さっきそう言ったろ！好雄のバカ！」

「な、なんだよう」
岬はさっさと岸から上がっていってしまった。四人ともびしょ濡れになったので一度家に帰ることになった。岬は帰るときも口数が少なかった。私は心配になった。
「岬ちゃん、本当に大丈夫？どこか痛いの？」
「なんだ雪枝、私は別に最初から平気だよ。心配するなって」
泥んこじゃない岬ちゃんって新鮮だなあ、と私は思ったものだが、彼女の目は心なしか赤いように見えた。
「岬、もしかしてお前、泣いてるのか？」
好雄が出し抜けに言うと、岬はぴたりと立ち止まり、そっぽを向いてしまった。
「よ、好雄、いい加減なこと言うとまた前みたいに泣かすぞ？いいのか？」
岬は三人に背を向けたまま言った。最後のいいのか？のところには彼女なりの迫力があったが、私には彼女の声が震えているのがわかった。
「ちょ、よせよ。そ、そうだよな、お前が泣くわけなんかないもんな。悪かったから、ほら行こうぜ？」
急に弱気になった好雄が声をかけても岬はまだ動こうとしない。よく見ると彼女の肩は震えていた。
「もう、岬ちゃんらしくないなあ」
そう言うと朔司がジーパンのポケットからハンカチを取りだし、岬の目元をそっとぬぐった。川に飛び込んだままの、ぐしょぬれのハンカチだった。
「なんだよ、私は、泣いてなんかいないって、い、言ってるのに……、う、うっ」
「わかってるよ。わかってる」
そう言いながら朔司は岬の顔をぬぐっていた。
「好雄くん、岬ちゃんを泣かせたっておじいちゃんに言いつけるからね」

朔司が急にこちらを見てにっこりと笑って言った。
「おい！それだけはやめてくれ。だってほら、岬は泣いてないって言ってるじゃないか、な？岬は泣いてないんだ。そうだろ、雪枝？」
好雄が大慌てで言った。
「プッ、ハハハ、アッハハハハ！」
私はそんなやりとりを聞いていておかしくなってしまった。気付いたらこらえきれずに笑い出していた。それを見た朔司も堰を切ったように笑い出した。よっぽどおかしかったのか、片手で腹を抱え、片手で岬の肩をぽんぽんとたたきながら大笑いしている。つられた好雄も、なんだかよくわからないといった風に一緒になって笑い出した。
楽しげな三人の笑い声、いつの間にか岬も、こちらを向いてその笑いの輪に加わっていた……。

◇◆◇◆◇

つづく

第４話

こうして橋の上に佇んでいると四人の笑い声が今にも聞こえてきそうな気がした。

初めて川に飛び込んだときのことだから、小学二年の夏の出来事だ。確かあの後四人は仲良く家に帰ったのだが、その途中で岬が口にしたセリフが傑作だったのを覚えている。

「朔司、好雄が私を泣かせたって、試しにあのじいさんに言ってみてくれよ。好雄のやつ、案外ほめられたりするんじゃないかと思ってさ」

口元に不敵な笑みを浮かべて彼女はそう言ったものだった。

朔司から聞いた話によると、小学校に入る前の好雄は相当ないじめっ子で、まわりの子をいつも泣かせていたらしい。私も初めて会ったときに泣かされた口だが、そんな好雄も負けず嫌いの岬にはなぜかかなわず、逆に泣かされていたそうだ。しかし男勝りな子だった岬も、この時は怖くなってしまったらしい。次の時からはもう怖がらずにむしろ楽しんで飛び込むようになっていたのは彼女らしいが……。

それで私はよく先に飛び込む勇気が出たものだ。弱虫で泣き虫だったのに。

あの時の好雄の、やればできるんだ、という言葉は今でも胸に響いている。

「やればできるんだ、か……」

私は人のいない上臈橋をあとにした。

周囲は相変わらずのどかな田園風景が広がっている。しかし人の姿はほとんど見えない。ここまで村を横切って歩いてきたのだが、途中ですれ違ったのは数えるほどの老人だけだ。風景は同じだ。あの頃に戻ったような感覚さえ覚える。だが他はなにもかもが違うの

だ。知った顔にも会わなければ、そもそも人がいない。このどこか心寂しい雰囲気は十三年前の当時にはなかったものだ。
だが、それも無理はない。
芦切沢地区はもう今年中に水の底に沈むのだ。
下流に建設中の大型のダムが近々完成を見る。そうすればここにはすぐに水が入る。今年中にだ。だから私は帰ってきた。この村の最後の夏に……。
計画が持ち上がったのはかなり前のことだった。住民との合意は順調に決まり、建設は急ピッチで進められた。世間が異常なインフラ熱に浮かされていた時代だった。
しかしそんな巨大ダムも、世間の熱が冷めると計画に対して嗷々と批判の声が上がるようになり、八割がた完成していた計画は中挫した。あの狂熱がなくともやり口が前時代的だった。
その計画がどうして去年になって再開になったのかはわからない。ただ芦切沢は、世間の狂った熱気や気まぐれな政府になすすべもなく弄ばれるしかなかった。
現在、この地区には自分の生まれ故郷に水没の直前まで居座ろうと執念く残るわずかな老人がいるだけだ。水没が決まって何年も経てば地図からも消えはする。忘れ去られもする。こののどかな風景の色づこうとしている水田の稲穂も、そんな彼らの最後の収穫なのだ。
バス停からずいぶん歩いてきた。長らく続いていた水田も途切れ、すぐ先にはこんもりと盛り上がった裏山が、その先には険しい山々が控えているのが見える。村の端までやってきたのだ。
この村の隅っこにある山、と言うよりも小高い丘と言った方が正確だが、その上には神社がある。芦切神社というのだが、そこにもたくさんの思い出が残っている。十分もあれば登りきってしまう高さだが、上の神社からは村が一望できるのだ。そこは今日の目的地でもある。私は表の旧参道ではなく裏手の新参道から登ることにした。正面の鳥居をくぐらずに迂回すると村では珍しい舗装路に出る。

急な石階段の旧参道とは別に後からつくられた道で、上の神社まで車で行けるようになっているから道幅は広い。
かつてこの新参道では毎年この時期に縁日が催されていた。村総出のものだったし、今では完全に人がいなくなってしまった上流の神納地区からも人が集まったためかなりのにぎわいを見せたものだった。
参道の坂道は登り始めの急な勾配を越えるといくぶんなだらかになった。私がここでの縁日に来られたのは小学四年の時の一度きりだった。里帰りの期間と縁日の日がたまたま重ならなかったからだ。
ひらけた坂道に屋台が並ぶ。私はその日も、三人と一緒だった――――。

◇◆◇◆◇

「雪枝、まず射的やらないか。きっと今年もいいものがあるぜ？」
坂道を上るなり好雄が言った。
「私はいいよ。だって鉄砲撃てないもん」
「撃てなくても大丈夫だって。朔司も岬も行こうぜ、射的」
私は走っていく三人について行った。
「欲しいのがあったら取ってあげるからさ」
走りながら横で朔司が言った。
三人とも射的が上手かった。もう何年もやっているからなのだろう。次々と標的を落としていく。私はと言うと文字通りの的外れだった。最初に目に入った雪だるまのぬいぐるみを狙ったのだが一度も当てられなかった。私はつまらなくなってしまった。
「ねえ岬ちゃん、一緒に金魚すくい行かない？」
「うん、いいよ。ちょっと先に行ってて。金魚すくいはいつもあのカーブのところにあるんだ」
岬は狙いを定めながら坂の上のほうを指さした。
「雪枝、おまえあの雪だるまが欲しいのか？」

私がひとりそこを離れようとすると好雄が不意にたずねてきた。
「う、うん。そうだよ」
「へえ、ずいぶんかわいいのが欲しいんだな。一緒におねんねするのかなあ？」
「もう、好雄のバカ！私行くからね」
好雄はイヒヒといたずらっぽく笑っている。私は射的の屋台に背を向けて坂を上った。後ろから「悪いな雪枝、すぐに追いつくから」という岬の声が聞こえた。
焼きそば、イカ焼き、じゃがバター、居並ぶ屋台を通り過ぎると急なカーブに差しかかった。そこから先はまた坂が急になっていて、屋台はそのカーブから先には出ていない。金魚すくいは岬の言う通りその曲がり角にあった……。

◇◆◇◆◇

射的は的外れだったけど、確か金魚すくいもうまくいかなかったんだっけ。
屋台の立ち並んでいた坂道を上り、金魚すくいのあったカーブまで来た。十四年前の夏の思い出。ここにこうして立っていると、あの時の子どもたちの楽しそうな笑い声や威勢のいい屋台の呼び声、発電機の音が今にも聞こえてきそうだ。
私は十四年前と同じように金魚すくいをした場所にしゃがみこんだ。
今振り返れば、そこに岬がいるんじゃないか……。そんな気がした――――。

つづく

第5話

◇◆◇◆◇

「雪枝、待たせたな」
逃げる金魚から目を離して振り返ると岬が立っていた。
「あ、岬ちゃん。全然待たなかったよ私。てへへ、ダメだった」
私は穴の開いてしまったポイを見せた。
「もう、へたっぴなんだな雪枝は」
岬はにっこりとして言った。よく見ると後ろ手になにかを持っている。
「ねえ岬ちゃん、背中になにか隠してるの？」
「おっといけない」
岬は驚いたような仕草をしたが、すぐに照れくさそうに言った。
「へへへ、そんなへたっぴな雪枝にプレゼントがあるんだ、ほら」
岬はさっとそれを差し出した。さっきの雪だるまのぬいぐるみだった。
「え、私に？うわあ、ありがとう！ほんとにいいの？岬ちゃんがとってくれたの？」
「そ、そうだよ。もう、そんなに喜ぶなよ。照れるだろ」
岬は心なしか顔を赤らめて言った。目がそっぽを向いているところがいたずらを隠そうとしている好雄に似ている。
「ありがとう岬ちゃん！」
「よせよ、お礼なんて。まったくしょうがないな。金魚も私がとってやるよ」
照れ隠しといった風にそう言って、岬は私の横に腰をかがめた。
そのときだった。
ドーン、ドドーン
後ろの方から音がした。

「ヤバい、始まっちゃった。雪枝、行くぞ！」
岬はやにわに私の手をつかむと素早い動作ですくっと立ちあがった。
「え、どうしたの急に、始まったってなにが？」
「花火だよ。知らなかったのか？ちょっと遠いけどさ。あ、また上がった！」
顔を上げると坂道を囲む木々の間から遠くの花火の光が切れ切れに見えた。
「上に行けばよく見えるんだ。急ごう」
「あ、待って。好雄くんたちは？」
「きっと先に行ってる。走るぞ雪枝」
岬は私の手を引いて坂道を走りだした。
「岬ちゃん早いってば、ちょっと待ってよ」
岬はそんな私の手を握ったまま坂道をずんずん駆け上がる。
「おーい岬、雪枝、早く来いよう」
上の方から好雄の声が聞こえてきた。見上げてみると好雄と朔司が手を振っているのが見えた。二人は岬と私が追いつくと、一緒になって走り出した。私は息が上がってしまったが、岬の手を強く握り返して必死になってついていった。
曲がりくねる坂道を駆け上がるとやがて頂上が見えた。道の両側の木々の間からのぞく小さな花火、私たちはその光を目指して走った。
「雪枝、もうすぐだぞ！大丈夫か？」
「だ、大丈夫だよ！」
駆け上がる坂道の上にあがる花火は、どこか現実のもののように見えない、夢の中ような美しさがあった……。

◇◆◇◆◇

４人で駆け上がった坂道、そこをひとり坦々と登ると視界が開け

てきた。
花火は芦切沢ではなく、ひとつ下流にある隣の地区の山の上から上げられているものだった。それがこの坂道や神社のある頂上から小さいながらもよく見えたのだ。
頂上は神社の敷地になっていて、遮る木々もなく見晴らしがいい。バス停、畦道、芦川、上臈橋、ここまで歩いてきた場所もよく見える。ここから見える景色にはそこかしこに夏の思い出が眠っている。
私はひと通り見晴らし台から芦切沢を眺めると後ろのベンチに腰を下ろした。
あの縁日の日の出来事はどこか夢の中の出来事のように感じる。今思い返してみると不思議とそう感じるのだ――――。

◇◆◇◆◇

「雪枝どうした、眠いのか？」
岬の声に私はハッとして目を覚ました。花火を見ながらベンチの上でうとうととしてしまったようだ。ちっとも眠くなかったのにどうしてだろう。
「あ、ごめん。別に眠くなんかないよ」
「そうか？花火、終わっちゃうよ。少ししか上がらないんだから」
「そうなんだ。きれいだね、花火」
向かいの山の上に上がる花火は遠く、小さかった。私は岬からもらった雪だるまのぬいぐるみと一緒に、金魚すくいの破れてしまったポイをまだ持っているのに気づいた。捨てずにそのまま持って走ってきたのだった。そのポイを眺めると、ふと目の前にかざしてみた。枠の中から花火が見える。
「おい雪枝、そりゃ何だ、虫めがね持ってきたのか？」
「え、虫めがね？」
好雄が不思議そうにたずねてきた。すると岬が言った。
「好雄、いい加減なこと言うな。まだ持ってたのか雪枝、金魚すく

いの」
「う、うん。捨てるの忘れてた」
「どうだ、よく見えるか？」
「だから好雄、虫めがねじゃなくてこれは金魚すくいのやつだよ」
岬が好雄を肘で小突いている。すると好雄は残念そうな顔をして言った。
「なんだ。虫めがねだったら貸してもらおうと思ったのに。ほら小さいだろ、花火」
「好雄くん、虫めがねで遠くを見たらぼやけて逆さになっちゃうじゃん」
朔司が得意気に言った。
「そうなのか？」
「そ、そうじゃんか」
「それは知らなかったな、どうだ雪枝、花火逆さか？」
好雄が本当に興味津々といった風にこちらに身を乗り出している。ポイから見える花火は大きくもない、逆さでもない、小さいままだった。
「だから虫めがねじゃないって言ってるだろ。このバカ！」
「いて！なにすんだよ岬！」
「ハハハハ」
横では3人が楽しそうにはしゃぐ声が聞こえる。だが私はどうしてか、ポイを目の前にかざしたまま、枠の間から小さな花火を眺め続けていた。夢の中のような、おぼろで儚い花火だった……。

◇◆◇◆◇

つづく

第6話

あの時、私は夢でも見ていたのかもしれない。
ひとつ溜息をつくとベンチから立ち上がった。周囲の蝉の声はいやがうえにも私を現実に引き戻す。
この神社に初めて来たのはいつのことだろう。お参りを済ませて本殿から表の手水場へ出るとすぐに古い石の階段が長々と下へのびているのが見える。芦切神社の旧参道。この神社がいつできたのかは知らないが、その時からある表参道だ。鬱蒼と茂る木々に囲まれた石階段は昼なお暗く、木洩れ日さえ射さない。舗装された新参道が裏にできてからは暗く急な旧参道をわざわざ通る者はいなくなった。その上、この石階段にはそれらしい言い伝えがついていたからなおさらのことだった。
神社の石階段には女の幽霊が出る。
長階段は決して数えてはならない。
そう言われていた。
私は最後に一度、神社を振り返って石階段を下り始めた。古い石段は長い年月を経て角がすり減り、苔まで生えている。階段は途中で折れ曲がりながら下へ下へと続いている。辺りは蝉の鳴き声と木々のこすれ合う音しかしない。時折鳥がいるのか、折れた枝が落ちるのか、木々の間からガサガサと大きな音がするのに驚かされる。下りながら段の先を見下ろすと、急な階段から今にも転げ落ちそうな感覚をおぼえる。
階段は暗い。下へ降りるほど暗くなって見える。木洩れ日ひとつ射さない木々の上にはさっきまでの暑い夏の日射しがあるなどと、ここからでは想像すらさせてくれない。私は暗く不気味な階段をゆっくりと下っていった――――。

◇◆◇◆◇

ガサガサと木々のこすれ合う音がする。立ち止まった私は弾む息を整え、階段を見下ろした。急な石段が下へ下へと続いている。階段はそこだけ抜き取られたように真っ暗で、強い夏の日射しもそこには全く届いていない。むしろそこだけ太陽も、いや、夏も存在していないかのようだ。

私がじゃんけんに負けて始まった鬼ごっこ。ようやく見つけた朔司を追いかけていくと、急な坂道を登り、いつしか見晴らしのいい知らない神社に辿り着いていた。

ここはどこだろう。確かに朔司が坂道を登っていくのは見たのだけれど、途中で見失ってしまった。もしかするとこの神社にまで来ていないのかもしれない。見晴らし台はとても眺めがよかったが、人気のない境内は不気味なまでに静まりかえっていて、照りつける夏の日射しの下で、どこかこの世のものではないような雰囲気があった。

「朔司くん、いるの？返事して！」

サァと風が一陣、木々をひとしきり揺らせて吹き去った。返事は返ってこない。私は怖くなった。

もうこの先の暗い階段を下っていったのかもしれない。私は石階段を下りることにした。途中にはところどころ苔生した石碑やすり減った石像が置かれている。

ここから降りなければよかった。私は何度も引き返そうかと悩みながら下っていった。段を数えていたのだがそれも途中からわからなくなった。

段の曲がり角の最初の踊り場まで来ると、そこに人がいるのが見えた。おばあさんがひとり、腰をかがめてなにかをしている。人気がまるでなかったので驚いたが、私が後ろまで近づいてもおばあさんは気付かない。しゃがみこんでごそごそと手提げの中を探している。なにをしているのだろうとよく見てみると、おばあさんの前の踊り場の隅に小さな祠を見つけた。

「おばあさん」
私は恐る恐る声をかけてみた。しかしおばあさんはまだ手提げの中をまさぐる手を止めない。ブツブツと独り言まで言い出した。
「お、おばあさん！」
大きな声で呼びかけると今度は反応があった。あれえ、と言っておばあさんは顔をあげた。
「おや、見ない顔だねえ。こんなところでどうしたんだい？」
しゃがれ声でうっそりと言うと、おばあさんはおかしいねえと、また手提げの中身を探し始めた。
「あの、ここを誰か通りませんでしたか？朔司くん、男の子が」
「朔司？ああ、あれなら今ここを走っていったがね。なにをしてるんだか……、おお、あったあった」
おばあさんは手提げの中からおまんじゅうを取り出すと、それを地面に並べた。またブツブツと独り言を言っている。
「ありがとう、おばあさん」
邪魔をしないようにと一声かけて、私は次の階段に向かった。すると後ろから急に呼び止められた。
「ちょいとお待ち」
「え？」
驚いて振り返るとしゃがんだおばあさんがこっちを向いて手招きをしていた。
「だぁめだよ、ここを通るんならちゃんと女郎さまに挨拶していくんだ。ほら、こっちにおいでな」
「あ、はい」
なんのことかわからなかったが、戻ってみるとおばあさんは手提げから出したおまんじゅうを祠に供えるところだった。本当に小さな祠だ。ひっそりと踊り場の隅にあるので普通なら見落としてしまうだろう。それくらい目立たない。まわりを見てもなんの祠なのかわかるような札も碑も見当たらなかった。
「ほら、ここにおいでな」

私は促されるままおばあさんの隣にしゃがみこんだ。おまんじゅうを渡されたので一緒に祠にお供えした。
「女郎さま、今日もお目許、ちっと通してくだしゃんせ、とおりゃんせえ」
そう言っておばあさんは祠に向かって手を合わせた。私もそれに倣った。
もう朔司はずいぶん先に行ってしまっただろう。他の2人もどこかで待っているかもしれない……。
「ほら、おまえさんも一緒にお願いするんだよ」
「あ、はい」
祠に向かって目を閉じていたら声をかけられた。私はおばあさんに続いてさっきの言葉を繰り返した。
「ねえおばあさん、女郎さまってなに？」
朔司の後を追う前に気になったので聞いてみた。
「あれ、知らないのかえ、足切女郎さま。この坂道の神様だよ。ここを通る人を悪いものから守ってくださるが、敬わなければ罰があたるとな」
「え、足切女郎って、ここがその石階段なの？」
石階段の幽霊の話は村に来てから何度か聞いたことがある。聞く度に怖い思いをしたものだが、ここがその場所だとは知らなかった。
「そうだよ。さあ、もう挨拶は済んだから行ってもいいよ。朔司のやつはもう下へ降りていったがな」
おばあさんはよっこらしょと腰をあげて下を指差した。
「あ、うん。だけど、大丈夫かな……、私、怖くなっちゃった」
「なにが怖いんだい。おまえさんはちゃんと挨拶をした。だから女郎さまが守ってくださるさ。あと、階段の数は数えちゃいけないよ、いいね？」
「え、私さっき数えちゃった……」
「本当かえ、でも、もう覚えてないようだけ」
「う、うん。途中でわからなくなっちゃった」

「じゃあ大丈夫だよ。お行き」
「はい」
私はお辞儀をしておばあさんのもとを立ち去った。すると次の階段の前でまた呼び止められた。
「ときにおまえさん、名前は？」
「あ、雪枝、能美雪枝って言います」
「ああ能美かえ。それじゃあ雪枝、気をつけておりるんだよ。転ぶんじゃないよ」
そう言っておばあさんは軽く手を振った。
「うん。ありがとうおばあさん」
「あたしゃダイっていうんだよ。ダイばあさんとお呼び」
「はい。さよなら、ダイおばあさん！」
私は手を振って踵を返した。その時、それまでずっと表情を変えなかったダイばあさんが、かすかに口元をゆるめて笑ったのが見えた……。

◇◆◇◆◇

ダイばあさん。その後も何度か顔を合わせる機会があったが、この時が初めてだった。クールなおばあさんだったが、村の間では変わり者と見られていたらしい。あの名もなき祠にお供えをしていたのもダイばあさんだけだった。
足切女郎の石階段。初めて行ったあのときまでここのことだとは知らなかったが、その怪談はその前にも聞いたことがあった。確か町内会かなにかの集まりで夜に村の青年館に行ったときに、好雄のおじいさんから聞いたのだった。
それはこんな話だった……。

つづく

第7話

それほど昔のことではない、名は思い出せないが、この村に見目麗しい型通りの美しい上臈がいた。女は良縁に恵まれ、評判の良い村の若郷士のもとに嫁ぐこととなった。

しかし、ことの経緯はわからない。どちらかに問題があったのか、両家の間でもつれがあったのか、結納まで済ませていた縁談は男の方から一方的に破棄され、破談となった。

ここまではよくある話だが、恋に破れた女はその後、妄執にとりつかれていった。

女は我を失った。夜な夜な男の屋敷に現れ、閉め出された後も毎夜辺りを徘徊するようになった。女は妄執の果てに、男を逆恨みした。

そして舞台となる芦切神社、男はその日もいつものように参詣を済ませると、もと来た石階段から帰路についた。

上りはよいが下りは怖い。急な階段から足を滑らせぬよう、男は一段一段慎重に下りていく。朝方にひと雨あったのか、階段はまだ乾ききっていない。雨滴が時折ポタリ、ポタリと頭上の木々から落ちてくる。

「一、二、三、四……」

人の声がした気がして、男は足を止めた。陰々とした林のどこからか、女が数を数える声が聞こえたが、耳を澄ませてもその後は聞こえてこない。はて空耳かなと、頭をひねると男は再び階段を下り始めた。

ゆっくり、ゆっくりと……。

「七、八、九、十……」

男は足を止めた。すると女の声もそこで止む。もう一度段を下りてみる……。

「十一、十二、十三、十四……」

女が、どこかで自分の下りる段を数えている。
「誰ぞ、そこにおるのか」
男は段の途中で立ち止まって声をあげたが応えはない。サァと風が一陣、木々をひとしきり揺らせて吹き去っていく。
「十五、十六、十七、十八……」
段を下りると、抑揚のない女の声が数を数えてついてくる。
「二五、二六、二七、二八……」
「りょ、慮外者、姿を見せろ！」
たまりかねて男は思わず大声を出した。だがやはり応えはない。後ろを振り返ってみても誰もいない、人の気配もしない。
いや、だが……。
すぐ横の茂みに声の主が、あの女の姿があった。白装束に手には大鉈が握られ、凍りついたような表情で男を見据えている。
男は声を失った。
振り上げられた大鉈が空を切り、男は真っ逆さまに階段を転げ落ちた……。

これが足切女郎の伝説として伝えられている話である。女はその後村から姿を消し、山中で頓死したと言われるが、足を切られて石階段から転落死する者がその後も相次いだらしい。
村の者はそれを石階段の足切女郎と呼んで恐れた。恋に破れた上臈が死してなお、無念を晴らそうと石階段を下りる者の足を切るのだと……。
噂は民話となり、民話は伝説となった。
芦切神社の石階段には死装束に大鉈を持った足切女郎の幽霊が出る。長階段は決して数えてはいけない。広い新参道ができて通る者がいなくなった今でも、それは伝説として残っているのだ。
ただ、ダイばあさんの語った足切女郎は、これとは少し違っていた。
女は婚約者の男を襲った後も石階段を下りる者を襲い続け、その

果て、山中で狂死した。その後も女は悪霊となって石階段を下りる者を襲い続けた。というのが村の言い伝えだが、ダイばあさんによると、女はその後、続発する転落事故の話を聞きつけた村の男衆に無残に殺されたのだという。

転落死した者全てに女が関わっていたかはわからないし、そもそも最初の男も死人に口無しで、本当に襲われたのかどうかはわからない。

女の想いは次第に妄執となり、妄執は女を狂気に染めた。山中に死した後も、恋に破れた男への想いを残して夜道をさまよい続けた、冷たく淋しい、哀れな妄執の幽霊……。

「かわいそうなひとだったんだよ」

ダイばあさんはこう言っていたものだった。村では石階段の悪霊として恐れられていたが、それがどう変じたものか、ダイばあさんの中では石階段の神様になっていたのだ。

曲がり角の踊り場にその名も無き祠はまだあった。私は用意してあったおまんじゅうをそのなにもない祠に供えた。

「女郎さま、今日もお目許、ちっと通してくだしゃんせ」

恐れられもすれば敬われもする。だが坂道の幽霊の伝説もまた、この村とともに水の底に沈んでいく。この冷たく淋しい女の幽霊は、坂道が水底に沈んだ後も石階段に残り続けるのだろうか……。

そうではないと、私は思う。

この村が水の底に沈み、人の記憶から忘れ去られれば、足切女郎の伝説も、哀れな亡霊の存在も消え去っていく。冷たく、淋しい想いだけを残したまま……。

つづく

第8話

昼なお暗い石階段は、初めて来た十五年前と、そして足切女郎の時代からなにも変わってはいない。
ゆっくりと滑らないように石階段を下る。ダイばあさんと会った時以来、四人で神社に来ることはあっても石階段を通ることはなかった。好雄たちも気味悪がって近づこうとはしなかったのだ。次の年の、あの縁日の夜を除いては――――。

◇◆◇◆◇

「それじゃ、誰が先に行く？」
「おい、ひとりずつなんて誰も言ってないぞ」
「好雄くんは言い出しっぺだから一番だよね」
「だから、ひとりずつじゃないって」
「もう、肝試しなんでしょ、好雄くん怖いの？」
「ち、ちがう。ひとりずつにしたら、ここにいる二人が下りれなくなっちゃうじゃんか？」
「そんなこと言って、じゃぼくが一番で下りるからいいよ」
「ちょ、おまえ……」
朔司はさらりと言い放つと、ひとりで暗い石階段の方へすたすたと行ってしまった。そのまま振り返る素振りも見せずに、彼の姿は階段の暗がりに消えていった。
花火が終わった後、好雄が急に石階段で肝試しをしようと言い出したのだが、その当人を含めていざ下り口まで来てみると本当に怖い。私は肝試しと聞いた時からもう岬の腕にしっかりとしがみついていた。
「朔司ってあんなに神経のないやつだったっけ……。おーい、ひとりじゃ危ないぞ！」

好雄が下に向かって呼びかけるが反応はない。
「おい、どうしたんだ好雄、怖いのか？」
不意に、後ろから岬が言った。いくら強がりの岬でもここでそれを言うとは思わなかった。しがみついたときから私以上に震えているというのに。
「なに言ってんだ。そっちこそ大丈夫なのか？オレは心配してるんだぜ？」
「心配？その前に自分の心配をしたらどうだ。私を甘く見るな」
岬が、またとんでもない大口をたたいている。さっきよりも手が震えているのにどこからこんな強がりが言えるのだろう。
「な、なんだよ。とにかくオレは朔司の様子を見に行かなくちゃいけないから、二人はむこうのもと来た坂道を下ってこい。あとで下で合流だ」
そう言って好雄は石階段に向かって歩き出した。
「おい、私は怖くなんか……！」
「わかってるから、今回は雪枝を連れて坂道を下りるんだ。まったく、朔司がひとりで先に行っちゃうから」
好雄の姿も石階段の暗がりに消えていった。あとには私と、ぶるぶる震える岬の二人だけが残された。
「ねえ岬ちゃん、好雄くんは真面目に心配して……」
「わかってる」
旧参道の下り口に立ちつくす二人の方には花火が終わったというのに誰ひとりとして来ない。暗い石階段をわざわざ通る人などいないのだ。
「でも大丈夫だから、行こう、雪枝」
岬は私の手を握り返して石階段の方へ向かった。その手はさっきよりも震えがひどくなってきている。
「え、やめようよ。危ないし、坂道から帰ろう？」
「なんだ怖いのか？私がいるから平気だよ。心配するなって」
「いやそうじゃなくて、岬ちゃん、無理するのはやめよう？手、す

ごく震えてる」
　岬が私の手を握りながら腕に力を入れるのがわかった。震えないようにしているつもりなのかもしれない。
「雪枝、怖がってても仕方ないよ。さあ行こう。二人で肝試しだ」
「ちょっと、そんなに強がらなくてもいいでしょ？ここで引き返したって好雄くんは笑ったりしないから。それに、私、怖い……」
「わかってる。でもさ、強がりでもいいじゃないか」
「え？」
「いいんだよ、強がりでも。本当は怖くってもいいんだ。だけど強がってでもこんなことで怖気づいてちゃいけない。私はもう怖がりじゃないんだ。それに雪枝は大丈夫だよ。その証拠に手が震えてないだろ」
　立ち止まった岬はにっこりと笑って言った。その手はまだ震えている。
「岬ちゃん……」
「雪枝は本当は弱虫でも泣き虫でもないんだ。私ももう怖がりじゃない。さあ、行こう」
　それを聞いて私は岬の手をさらに強く握り返した。二人は暗い石階段を下っていった……。

◇◆◇◆◇

　岬はいろいろな面で強い人だった。彼女の強がりはただの意地で言っているのではない。自分の怖がりな面を克服しようという意思の表れだった。あの日の岬の言葉には今でも勇気づけられる。
　足切女郎の長階段、名も無き祠のある踊り場の次の一続きの長い階段がかつて幽霊が出たといわれる場所だ。やはりここは昼間でも怖い。足元に注意してゆっくりと下りながらも、両側の茂みがどうしてか気になる。横を向いて見てみたくなっても、怖くてそうしようという気にはならない。だからと言って足元ばかり見ているとど

うしても段を数えたくなってくる。数えてはいけないと言われていればなおさらだ。

この石階段を下りるのは神経を使う。ようやく下まで来た私は長階段の最後の一段を注意深く踏みしめた――――。

◇◆◇◆◇

つづく

第9話

石階段は想像以上に暗かった。明るい暗いの話ではない、闇だった。ところどころ外灯が立っていて目印になるものの、それは弱々しい光がただ宙に浮いているだけのようで明るさなどほとんどない。

「岬ちゃん、手、痛い……」

「あ、ごめん」

私は相変わらず岬の腕にしがみついていたが、岬は震える手で強く握り返してくる。

「あ、そうだ、ここで女郎さまに挨拶しなきゃ」

あの名も無き祠のある踊り場に差しかかったので、私は岬を止めた。一応ここにも外灯が立っていて、ぼんやりとした光を投げかけている。

「ちょ、なにを言い出すかと思ったら、冗談はよせよこんなところで」

「冗談じゃないよ。ちょっとここで手を合わせるだけだから、ね？」

「女郎さまって……、ここの悪霊だろ？いいから早く行こう」

岬の手の震えがまた激しくなった。本人はなんとか平静を装おうとしているようだが手だけがそれに反して、早く行こう、できるなら駆け抜けてしまおうと私に訴えてきている。

「え、でも……」

「でももなにも、こんなところで幽霊のことをもたもたやってて、本当に出たらどうするんだよ。あ、わかった、それ、あのばあさんに言われたんでしょ。ダイばあさん」

「うん、そう。ちゃんと挨拶すれば守ってくれるんだって」

「守ってくれるか？だってあれは悪霊なんだろ？あのばあさんはでたらめだから気にしちゃダメだよ。ほら行くぞ」

「でもでも、ちゃんとしないと罰があたるって言ってたよ。だから、ね？ちょっとだけ」

それを聞いて岬は急に私の手を引っ張るのをやめた。
「ま、まったくしょうがないやつだな、ちょっとだぞ？」
「ありがとう岬ちゃん」
「いいから早くしよう」
ふたりは祠の前にしゃがんで手を合わせた。この暗闇のなか目を閉じるのは怖い。しかし岬を見てみると、しっかりと手を合わせて真面目に目を閉じている。
「女郎さま、今日もお目許、ちっと通してくだしゃんせ」
私は目を閉じた。そうすると、もう一度目を開けてももうなにも見えない、暗闇の世界のままなんじゃないか、そんな気がした。
「ねえ雪枝、怖くないの？」
「え？」
横を見てみると、岬がまじまじとこっちを見ていた。
「怖いよ。怖いに決まってるでしょ」
「そ、そっか。ずいぶん平気そうだったから……。それじゃ行こう」
「うん」
「私も……、怖いよ」
岬はすぐには動こうとせず、ゆっくりと言った。
「わかってる。でも、怖がっちゃいけない、でしょ？」
「そうだな」
私は差し出された岬の手をとって立ち上がった。その時だった……。
「おーい、朔司、どうしたんだ？」
下の方から声がした。
「好雄くんの声……」
「ああ、まだ近くにいたんだな。行ってみよう」
「あ、待ってよ岬ちゃん！」
岬は急に握っていた私の手を離すと、そのままひとりでずんずんと階段を下っていってしまった。岬の姿はたちまち暗い階段の先に消えていった……。

祠のある踊り場の先には一続きの長い階段が連なっている。ここにも途中途中に外灯が立っているが、ほかは全くなにも見えず、その明かりとわずかに照らされている真下の段だけが闇の中から切り出されたかのようだ。弱々しい光にぼんやりと照らされて浮かび上がる石階段。もしかしたらその外灯と外灯の間には、ただ闇が横たわっているだけで段はないんじゃないか、照らされて切り出された部分だけが、なにも見えないどろりとした闇のなかにふわふわと浮いているんじゃないか。踊り場にひとり残された私は、下へ続く石階段を前にしてそんな気がした。

「岬ちゃん、おいて行かないでよ！」

もうここからひとりで下りないといけない。いざひとりになってみると、それまで想像もしなかったような別の恐怖感がおそってくる。気付くと、自分の手も震えだしているのがわかった。

「でも、怖がってちゃいけないんだ……」

私は弱虫でも泣き虫でもない。そう自分に言い聞かせて段を踏み出した。

暗闇の階段は足元さえ見えない。頼りになるのは自分の勘と勇気だけだ。ゆっくり、ゆっくりと、気は急くが慎重に下っていく。

今横を見たら、そこに白い幽霊がいるんじゃないか、もしかすると後ろからついてきてるんじゃないか……。周囲の暗闇がそのまま恐怖となっておし包んでくる。それでも、いや、だからこそ横も後ろも見てみようという気にはならない。見てはいけない、という気さえする。

見えない段から見えない段へ、一段一段滑らないよう確実に踏みしめていく。

「一、二、三、四……」

あ、いけない……。

周囲の暗闇は目を向ける勇気が出ない、段は数えてはいけない、そうして足元ばかり注意していたら、思わずその段を数え始めている自分に気付いた。これはまずいと、一度頭を振って再び下り始め

る。
　周りを見ずに足元に注意して、それでいて段を数えずに降りるのはどうしてか難しい。額と背筋に嫌な汗をかきながら下っていくと、ようやく下が見えてきた。合流したらしい三人の姿が次の踊り場にぼんやりと影を落としている。
「おおい、みんな待っててくれたの？」
　段の上から声をかけてみると、気付いた三人がそろって顔をあげた。
「悪い雪枝、先に行っちゃって、なかなか来ないから今もう一度上がろうかと思ったところだった」
　岬が安心したといった風に言った。
「おいちょっと待て岬、あれは雪枝じゃない、足切女郎の幽霊じゃないか？」
「うそ！？」
　好雄がまたでたらめを言ったが、それに岬が真面目に驚くのが見えた。
「もう、私は幽霊じゃないよ！」
　私は三人の待つ踊り場まで照らされている石段を一気にかけ下りようとした。
「待て雪枝、そこの最後の一段、見えなくなってるから気をつけろ！」
「え？」
　好雄に言われて私はとっさに立ち止まった。下を見ると、段は残り二段ある。その最後の一段が見えなくなっている？
つづく

第１０話

注意深く目を凝らして見ると、ある。外灯に照らされている残りの二段の次にもう一段、見えない段が確かにある。

上から照らしている光の加減なのか、最後の一段だけがきれいに影になっていて、下りようとすると段が一段少なくなって見えるのだ。

「朔司がそれに気づかなくってさ、転んでやんの」

「なんだよ。好雄くんだって転んだじゃないか」

「私にはちゃんと見えたぜ」

三人はそう言うが、この最後の一段は普通だったらわからないだろう。最初から暗闇でなにも見えないのならそろそろと手探りで行きもするが、こうやってほかは明るいのに最後の一段だけが不意に消えていれば誰だってつまづいてしまう。普段通っている階段でも注意しないで残りの段数の見当を間違うと、最後の段で危ない目にあう。特に、もう下り終えたと思ってまだもう一段あったときなどは、踏み外して最悪転んでしまうだろう。

消えてしまう数えてはいけない階段の、最後の一段……。光の加減だとわかっている、そしてなんでもないことなのに、私は心底ぞっとした。

「本当だ……。ありがとう好雄くん。危ないね、これ」

私は見えなくなっている最後の一段を注意深く踏みしめて、三人のいる踊り場に下りた。

「ふむ。この見えなくなってる最後の一段が足切女郎の怪談の真相だったんだな、大発見だぞ、岬」

「いやいや、一段踏み外したくらいじゃ死んだりしないから。それに昔はこんな外灯はなかったでしょ」

わざとなのか、好雄がまた的外れなことを言うのに、いつものように岬がつっこんでいる。消えた最後の一段に怪談めいた恐ろしさ

を感じたのだが、二人のおどけた掛け合いを聞いてそれもきれいに吹き飛んでしまった。
「それより二人とも、坂道には行かなかったんだな」好雄が言った。
「まあね、せっかく肝試しってことになったから、こうしてひとりずつ下りてきたんだ。なあ、雪枝？」
「え？あ、うん」
　岬に促されて私はうなずいた。つまりここまで四人ともひとりで来た、ということになるのか。本当は途中まで二人一緒だったのだけど。
「へえ、雪枝もすごいけど、岬にそんな根性があるとは思わなかったなあ。見直したよ」
「それどういう意味？私を甘く見るなって言ったろ？」
「いや、だからほめてるんじゃないか」
「朔司くん、転んだって本当？大丈夫？」
　私は静かだった朔司に話しかけてみた。
「うん、別に、大丈夫だよ。それより先に行っちゃったりしてごめんね。みんなに迷惑かけたみたい」
「ううん、気にすることないよ。肝試し、楽しかった」
　こうして四人がそろうとさっきまでの怖さもうそのようだ。下まではあと少し、短い階段を下りるだけだ。
「じゃあ、みんな行こう」
　私は三人に呼びかけた。
　私たちはそろって石階段を後にした……。

◇◆◇◆◇

　あの見えなくなっていた最後の一段、もちろん昼間の今なら外灯もついていないので他の段となにかが違うということはない。だがあの暗闇で、幽霊が出るとか数えてはいけないとか聞いていればそれが光の加減だとわかっていても怖い思いをするものだ。

石階段を下り終えて旧参道の正面の鳥居をくぐると、迂回する前の元来た場所に出た。薄暗い林をようやくぬけて空を見上げると、もう日が傾き始めている。聞こえてくる蝉の鳴き声も別のものが混じるようになっている。ひぐらしの鳴き声だった。

ここまでずいぶん歩いてきた。山に囲まれている土地だから日が暮れるのは早い。帰りのバスにも遅れるわけにはいかない。私は少しペースを速め、足早に歩き出した。

もうここにも来ることはない……。

冷たい女の想い、ダイばあさん、四人で行った縁日……。

私はもう一度、神社の方を振り返った――――。

つづく

第11話

◇◆◇◆◇

「あれ……、ない」
「ん？どうしたんだ雪枝」
肝試しの後、家に向かう畦道の途中で私が急に立ち止まると、並んで歩いていた岬も止まってたずねてきた。
「どうしよう、なくしちゃったみたい……」
「なにをなくしたんだ？」
「雪だるま……」
石階段を後にしてここまで歩いてきた今になって、ようやく私は自分が持っていたものがなくなっているのに気づいた。前を歩いていた好雄と朔司も、どうしたんだと戻ってきた。
「雪だるまって、さっきまで持ってたじゃないか。落としたのか？」
「そうみたい」
花火を見る前に岬からもらったプレゼントのぬいぐるみ、どこにおいてきてしまったのだろう。ポケットやポーチを探してみても出てこない。自分の手にはとっくに捨てたと思っていた穴のあいたポイが、なぜかそれだけいかにも大切そうに握られていて、うれしくて大切に抱いていたぬいぐるみはそれだけ逃げていったようになくなってしまった。
「雪枝がぬいぐるみを落としたんだって」
岬が戻ってきた好雄と朔司に言った。
「雪枝ちゃん、それさっきまで大事そうに持ってたよね？」
「うん、でもどこで落としたのか全然覚えてないの……」
朔司が心配してやさしくきいてくれているのに、私は心がえぐられる思いがした。残念で仕方がなかった。
「ごめんね、せっかく朔司くんがとってくれたのに……」

「どうして雪枝ちゃんが謝るの？それにぬいぐるみをとったのは岬ちゃんでしょ？」
そうだった。私は岬からぬいぐるみをもらったのに、いつから朔司がくれたものと勘違いしていたのだろう。
「あ、ごめん岬ちゃん。せっかくのプレゼントだったのにね。なのに私、ぐずで……、なくしちゃった……」
さっき岬から弱虫でも泣き虫でもないと言われたばかりなのに、残念で残念で、気づくと目から涙があふれていた。
「おいこんなことで泣くなよ。まだなくなったと決まったわけじゃないだろ。ぬいぐるみ、階段で合流した時にはまだ持ってたよな？」
「そうだっけ？私、全然覚えてない……」
好雄もしょぼくれている私を励まそうとしているのに、私は自分が情けなくなった。大切に持っていたのになにも覚えていないなんて……。目からは涙が止まらない。
「まったく、さっきは怖がりもしなかったくせにここにきて簡単に泣くなよな」
岬が急に私のポケットをまさぐると、中からハンカチを出して目元をぬぐってくれた。ごしごしと乱暴だが、岬の優しさが伝わってくる。
「でも確かに、あの見えない階段のところでは持ってたよな」
「そうだろ岬、オレはそのとき見たんだから。よし、今からオレがひとっ走りしてとってきてやるよ。三人ともここで待ってろ！」
「おいちょっと待て好雄！」
言うだけ言ってひとりで行こうとする好雄を、岬がとっさに手をつかんで引きとめた。
「そんな、いいよ好雄くん。暗いし、どこで落としたか全然わからないもん」
好雄が本当に行こうとしたので私もあわてて引きとめた。
「好雄、おまえだけいいとこ見せようとしたってダメだ。私も行こう」

「え？」
好雄をやめさせようとしていると思ったら、岬まで……？
「別にいいとこ見せようとしてるわけじゃないけどさ。オレはひとりでいいよ。五分で戻ってくるから。それに岬、怖いんじゃないのか？」
「誰が怖いなんて言った？私はそんな怖がりじゃないよ。さあ行くぞ」
「よし、わかった。言っとくけど、オレは走るぜ？」
「それがどうした」
好雄と岬はふたりだけで話を進めてもう神社の方へ行こうとしている。目的のものをなくした当の本人は完全に蚊帳の外だ。
「ちょ、ふたりとも……」
「じゃあ雪枝と朔司はここで待ってろ。すぐ戻ってくる」
そう言って好雄はくるりと背を向けて走り出した。岬はもう先に行っていて好雄を待っている。私は最後に引きとめてくれるんじゃないかと思って、朔司の方を見た。
「それじゃ五分だよ！五分経ったら先に帰っちゃうからね！」
朔司の呼びかけにわかった！と答える岬の声が聞こえたが、二人はもう神社の方へ走っていってしまった。
「朔司くん、ふたりとも行っちゃったよ？」
「うん、本当は明日明るくなってから探しに行こうと思ったんだけど……。見つからなかったら明日行こうね？」
「え、ありがとう。ごめんね私なんかのために」
五分で戻ってくる……か。いずれにしても私も朔司も時計は持っていないし、待っている時間は長く感じられる。ふたりは畦道のわきに並んで腰を下ろした。湿った夜風が吹いてきて、手元の草をそよがせる。
畦道に座って眺める村の風景はさっきまで真っ暗だと思っていたのに、月明かりに照らされて遠くまでよく見える。夜ってこんなに明るいんだ、私はひとりそう思った。

「肝試し、怖くなかった？」
朔司と急にふたりきりになって、なにを話したものかと少し緊張して遠くを見ていると、不意に話しかけられた。
「え、怖かったよ。怖いに決まってるでしょ」
「それでもひとりで下りてきたんだからすごいよ」
「あ、本当は途中まで岬ちゃんと一緒だったんだ。それが急に踊り場で置いていかれちゃって、すごく怖かった……」
「そうだったの？岬ちゃん、怖がってなかった？」
「全然怖がってなかったよ」
ふたりとも石階段では怖い思いをしたけれど、たとえ強がりでも怖がっていたとは言いたくない。
「ふうん」
「でも、ひとりで先頭きって行っちゃうなんてすごいよ朔司くんは」
「ぼくだって怖かったよ。ごめんね。ひとりずつじゃなくてみんなで行けばよかったね」
「でもそのおかげで私自信がついたよ。もう少しくらいのことでびくびくしたりしないって。岬ちゃんもそうだと思う」
「そっか。でも雪枝ちゃんはもとから怖がりじゃないし、岬ちゃんも本当は自分が思ってるほど怖がりじゃないから大丈夫だと思ってたよ。好雄くんは心配してたけど」
「もう、本当はひやひやしたんだからね」
「あはは、ごめんごめん」
また湿った風が吹いてきてふたりの間を抜けていった。サァっと風に揺れる稲の音が波音のように聞こえてくる。
朔司とは普段何気なく一緒にいるのに、こうしてふたりきりになってみるとどうしてか緊張する。少し間があいて気まずい沈黙がふたりの間にふってきた。それを意識すると余計緊張して言葉が次げなくなる。
普段朔司といて気まずい思いなどしたことないのに……、なにか話さなきゃ、私は焦らされる思いがした。

「ねえ朔司くん」
「なに？」
「えっと、あの雪だるまのぬいぐるみ、本当は朔司くんがとってくれたんでしょ？」
　私の急な問いかけに、朔司は驚いた顔をした。
「どうしてそう思ったの？ぬいぐるみを渡したのは岬ちゃんでしょ？」
「そうだけど、なんか隠してるみたいに見えたから」
　私にそう言われると、朔司は下を向いてなにかを考えあぐねるような仕草をした。
「へえ、よくわかったね。だけどおしかったな。ぬいぐるみをとったのはぼくでも岬ちゃんでもないんだ」
「え？じゃあ好雄くんが？」
「もう、ばれてたんじゃ仕方ないなあ。そうだよ。好雄くんがとったんだよ。雪枝ちゃんが先に行った後みんなで狙ってさ、ずいぶん苦労したけど好雄くんが一番熱心でようやくとれたんだよ」
「そうだったんだ。あとで好雄くんにお礼言わなきゃ」
「あ、それはダメ。今言ったのは内緒なんだから」
「え、でも……」
「好雄くん自分がとったのに渡すの嫌がってさ、とったのも岬ちゃんということにして全部押し付けたってわけ。なんか渡す前から照れてたもん」
　そうか、岬もずいぶん照れていたけどね。帰ってきたらうんとお礼を言おう。もちろん今言ったことは内緒だから、取りに戻ってくれたことに対してだ。
「わかった、内緒ね。でも来ないねふたりとも」
　もう五分は経っただろうか。二人が戻ってこないかと神社の方を見てみたが、暗くてよく見えない。見上げてみると、さっきまで煌々と夜道を照らしていた月が雲に覆われているのがわかった。
「なんだか雨が降りそうだね」

朔司も空を見上げながら言った。夕立が来るのだろうか。雲が来る前はそんな気配はなかったが、時折吹いてくる湿った風はさっきよりも冷たさが増して、水のにおいが混じっている気もする。朔司に言われなければわからなかったが、確かに夕立が来る前の風とにおいを感じた。

「あ、ふたりが見えた！」

「ホント？」

朔司が言ったので私も目を凝らして見ると、走っている二人の姿が見えた。

「早いからきっと見つかったんだよ」

それを聞くと、私は立ち上がって二人に向かって大きく手を振った。

「好雄くん、岬ちゃん、ありがとう！」

私は出せる限りの大きな声でふたりにお礼を言った。それが聞こえたのか、好雄も走りながらこっちに向かって手を振っている。

ポタリ、ポタリ……

不意に雨粒が額を打った。

来たな、そう思った時にはもう大粒の雨がざあっと激しく降り始めていた。

「雪枝、朔司、降ってきたから走れ、家まで競争だ！」

戻ってきた好雄が威勢よく言った。

「待たせたな雪枝。あったぞ雪だるま」

私は岬から差し出されたぬいぐるみを受け取った。さっきまでは悔しい、申し訳ないという気持ちでいっぱいだったけれど、今は違う。私は岬の顔を見た。本降りとなった夕立のおかげで、彼女の顔はもうびしょぬれだった。

「ありがとう岬ちゃん！どこにあったの？」

「ん？わかりやすいところだよ。いいから走るぞ！びしょぬれだ！」

岬に肩をたたかれて、私は三人に続いて走り出した。

「好雄くん！」

私は前を走る好雄に追いついた。
「ああ雪枝、よかったな見つかって」
「うん、ありがとう好雄くん」
「お礼は岬に言えよ。見つけたのも、とってきたのも岬だ」
「でも、ありがとう！」
雨足がどんどん強くなるなか、私たちは畦道を走り続けた……。

つづく

第12話

十四年前、四人で行った最初で最後の縁日の思い出、か……。
三人の優しさ、あの頃の友情。そんなものがあの雪だるまのぬいぐるみからは感じられる。
夕暮れまでにはまだ間はあるが、傾いてきた日に落ちる影は次第に長さを増してきている。帰りのバスまでにはまだ時間がある。私は足早に最後の目的地に向かった。
そこはバス停とは別の方向で、わざわざ遠回りをしてまで向かう必要はない。なにかをする用もないし、そこでの思い出は今でも昨日のことのように鮮明に覚えている。しかしそれを言えば神社にも、この村にだって帰ってくる必要はなかったのだ。
だがそれでも私は戻ってきた。それはなんのためでもない、水の底に沈む村とともに人々の記憶からは忘れ去られるが、私の胸の中には確かに残り続ける思い出……、ただそれだけのためだ。
目的の建物は徐々に見えてきた。背後の山からはひぐらしの鳴き声が聞こえてくる。日中の大合唱とはうって変わり、ひとつ、ふたつと淋しげに響いてくるその鳴き声は、一日の終わりを思わせる、どこかもの悲しい哀愁を漂わせている。歩きながら、私はそう感じた――――。

◇◆◇◆◇

背後の山からひぐらしの鳴き声が聞こえてくる。夕暮れにはまだ早いが、傾く日に落ちる影は次第に長さを増している。
芦切沢小学校。縁日の翌日、その日も一日遊びまわった私たちは夕方になってなぜかこの場所に来ていた。
「おい雪枝、これくらいで泣くことはないだろ？」
岬が私のハンカチを使って目元を拭う。私はここにきてまためそ

めそと泣いていたのだった。
「だって……」
「また来年会えるでしょ？ぼくたち待ってるからさ」
朔司がにっこりとして言った。
東京に帰る日取りが早くなり、私は縁日の次の日に帰らなければならなくなった。最後の一日が終わり、もうすぐ準備をしている家族のもとに戻らなくてはならない。
「うん。……ダメだね私、弱虫でも泣き虫でもないって言われたのに」
「ああ、ダメだな。だけど、本当に泣き虫でも弱虫でもないなら、また来年に会うまでくよくよしないで元気でいろよ」
岬が私の肩をやさしくたたいて言った。
そこに少し離れていた好雄が近づいてきた。
「ん」
「え？」
好雄は私に向かってむっつりとこぶしを突き出している。
「ほら、手を出せよ」
「あ、うん」
言われたとおりに手を出すと、好雄の握りこぶしから小さな石ころが出てきた。
「え、これ、くれるの？」
わたしが聞くと、好雄はこくりとうなずいた。
それは豆粒ほどの小さな普通の砂利石だった。しかしよく見ると端の方が欠けていて、その断面は外見からは想像できないようなきれいな紫色をしていた。
「見た目はただの石ころなのに、中はきれいな色……」
「神社に落ちてるんだ。お守りの石。それを持ってれば泣きたくなることやくじけそうなことがあっても勇気を持っていられるんだって。だからそれを持って東京に帰れよ。それにオレも朔司も岬も同じ石を持ってるから、また来年必ず会える」

みんなと一緒のお守りの石、しょぼくれていた私は好雄のプレゼントに元気づけられた。
「好雄くんありがとう。私うれしい」
「なんだよ、礼なんかいらないって。それに雪枝は実際岬なんかよりも根性あるからな、こんな石いらないくらいさ」
好雄は照れ隠しといった風にとぼけて見せた。
「なんだって？まあ、好雄と朔司のことは私がいるから大丈夫だよ。なにも心配することはないから。また来年だ、雪枝」
そう言って岬は手を差し出した。私はそれを見て岬の手を握った。朔司、好雄とも続いて握手をした。
「雪枝ちゃん、また来年ね」
「じゃあな、待ってるからな」
「うん」

◇◆◇◆◇

これが三人との別れだった。
次の年も私は同じように芦切沢に戻ってきたが、私を待つ三人の姿はなかった。
ダム湖化と住民立ち退きの話は私の知らないところで進められていたらしい。十三年前に私が戻ってきたとき、三人はもうどこかに引っ越してしまった後だった。
そして祖母もまた、私を待ってはいなかった。初めて芦切沢に来た時と同じように、帰った私を待っていたのは祖母の葬式だった。
十三年前、五度目の芦切沢の夏、会えると思った人は皆、私を待ってはいなかった……。そして私の里帰りはこの年が最後になった。
もうすぐバスの時間だ。
小学校に背を向けて、私は畦道をバス停に向かって歩き出した――――。

つづく

第13話

◇◆◇◆◇

ない、見つからない……、どこで落としたんだろう……。
畦道には夕暮れが迫ろうとしている。足元を探しながら畦道を歩きまわって、もうどれくらい時間が経っただろう。暗くなってしまったらあきらめるしかない。
「雪枝、雪枝……」
遠くから名前を呼ばれた気がした。
「そこにいるのは雪枝かえ？」
顔をあげてみると、背の曲がったおばあさんがそこにいた。私はそれが一瞬亡くなった祖母に見えた。
「あ、ダイおばあさん、こんにちは」
「おう、やっぱり雪枝だ。久しぶりじゃね。どうしたんだい、こんなところで下ばかり見て？」
「うん、ちょっと大事なものをなくしちゃって」
「おや、大事なものって、なにをなくしたんだい？」
「小さな石、見た目はただの石ころだけど端っこがきれいな紫色をしてるの。好雄くんからもらったんだけど、この辺で転んだときに落としちゃったみたい……」
「ほお、そうかえ」
ダイばあさんはうっそりと言うと、私の隣に来て持っていた手提げを下ろした。どうしたんだろうと思って見ていると、そのままうむ、とうなりながらしゃがみこんで地面を探し始めた。
「あの、ダイおばあさん？」
「なんだい、ぼさっとして。私も一緒に探してやるよ。大事なものなんだろ、え？」
「あ、うん。でも悪いからいいよ。私、ひとりで探す」

「なに言ってんだい。暗くなったら見つけられないから早く探すんだよ。ほら」
下を向いたままダイばあさんは言った。
「あ、ありがとう。ダイおばあさん」
「礼は見つかってからにおし」
私は再びしゃがんで足元を探し始めた。
ダイおばあさんってどこか岬っぽいところがあるな、かがみこんで地面を探すおばあさんを見て私は思った。

「ないねえ……」
「うん、このあたりで落としたみたいなんだけど……」
ふたりで探し始めて小一時間ほど経っただろうか、もう日が暮れて、あたりは暗くなろうとしていた。四人でおそろいの大切な石だったのに……。
「雪枝や、残念だが暗くなってきたからもうやめにしよう。今日はこれ以上探しても見つかりやしないさね」
ダイばあさんが不意に顔を上げて言った。
「そうだね……」
「今日のところはもうしょうがない。だけどまた明日来ような？」
「うん、ありがとう岬ちゃん」
「礼は見つかってからだよ。それにあたしゃダイだ。岬じゃない」
「あ、ごめんなさいダイおばあさん。なんでかな、間違えちゃった……」
岬か……、どこに引っ越してしまったのだろう。好雄も朔司も、もう会えないのだろうか。
「あの石ね、神社に落ちてるらしいんだけど、好雄くん朔司くん岬ちゃんと四人おそろいの特別な石だったんだ」
「ほお、そんな大切なものをなくしちまったんかえ」
「うん。お守りの石。四人おそろいだから持ってれば必ずまた会えるって去年もらったんだけど、今年みんなとは会えなかった。石も

なくしちゃったよ……」
「まだなくなったと決まったわけじゃないさ」
「でもなくしちゃったから、私たち、もう会えないのかな？」
三人の行き先は結局わからずに、大切なものもなくしてしまった。
くやしい、淋しい、悲しい、そんな思いがこみ上げてきた。
「おっと、こんなところで泣きなさんな。もう大きいんだから」
ダイばあさんは懐から古風な手拭いを出すと、私の目元を拭いてくれた。それでも私は悲しくて仕方がなかった。
「だって、だって、三人ともどこに引っ越したのかわからないんだもん……。もう、会えないよ……」
芦切沢に帰ってから泣かなかったのに、今になってあふれてきた涙が頬をつたう。
「会えるさ」
「え？」
顔を上げると、普段からあまり表情を変えないダイばあさんが珍しくにっこりと笑っていた。
「きっと会えるさ。あてはなくとも生きてりゃそのうち会える。そういうもんさね。だからめそめそしなさんな。もう泣き虫じゃないんだから」
ダイばあさんも、私を泣き虫じゃないというのか……。私は泣いてばかりいるのに……。私は大きく深呼吸をして、ごしごしと目をこすった。
私は泣き虫じゃない。三人にもそう言われたんだった。泣くのはもうやめよう。
「でも、やっぱり会えないよ。私は東京に帰るし、三人ともどこにいるのか全然わからないから」
「そうだねえ、やっぱりすぐには会えないかもしれないさね」
「うん、また来年会おうって約束したんだけどね……」
「そうかえ」
私はまた下を向いた。下を向くとまた涙がこぼれてきそうになる。

「雪枝、三人と一緒で、楽しかったかえ？また会いたいかえ？」
少し間をおいて、ダイばあさんが聞いてきた。
「楽しかった。また会いたい……」
私はうつむいたまま答えた。
「うむ。もしかすると本当に会えないかもしれないけ。だけれども雪枝、もし会えなくても、いじけちゃいけないよ」
「うん……」
「確かに行き先がわからないんじゃ、この先ずっと会えなくてもそれは仕方のないことかもしれんさ。けどな、いいか雪枝、もし会うことができなくても、その楽しかった思い出は大切に胸の中にしまっておくんだ。そうしてくじけずにさ、その思い出をはげみにして、前を向いてやっていくんだ。でも下を向いて振り返ってばかりじゃいけないよ。思い出は思い出として大切にしまってさ、それで前へ進んでいくのさ」
思い出は思い出として……か。いつかまた会えると信じていても、いつまでも思い出にすがって立ち止まっていてはいけない……。

つづく

最終話

「うん、私もうくよくよしない……よ」
「その意気さね。あたしゃ戦争で亭主を亡くしたがね、あの人との思い出はちゃんとここにしまってあるのさ」
　ダイばあさんは自分の胸をぽんと叩いて言った。
「そうだったんだ」
「おうさ。まあ、私の場合は死んじまっていないが、おまえさんたちはまだ先が長いんだ。生きてりゃどこかできっと会えるよ」
　そう言ってダイばあさんは私の肩にやさしく手を置いた。
「うん、ありがとう。私、元気が出た」
「ようし、それじゃあまた明日、ここで宝探しだ。昼間だったら見つかるべさ」
　お守りの石、確かに明日の明るいうちに探せば見つかるかもしれない。けれど、私は……。
「ううん、ダイおばあさん、もういいの」
「なんだい、石がもういいのかえ？大事なものなんだろ？遠慮はせんでいいから」
「うん。大事だけど、もう探すのはやめようと思うの」
「どうしてだい急に、なにもあきらめることはないじゃないか」
「ううん、違うの。探すのはやめるけどあきらめるんじゃない。ダイおばあさん、さっき自分で言ったでしょ、下を向いて立ち止まってばかりじゃいけないんだって」
　その私の言葉を聞いてダイばあさんは驚いた顔をした。
「そうか、ほっほっほ、そうかえ。わかった。探すのはやめような。実際石がなくたっておまえさんたち四人はどこかできっと会えるよ。それに雪枝は弱虫じゃないんだ。お守りがなくてもくじけずにやっていける」
「うん、ありがとうダイおばあさん」

見上げると、暮れゆく空はきれいな群青に染まっている。私は顔をあげて、畦道を歩きだした……。

◇◆◇◆◇

芦切沢での最後の思い出……か。

次の年、祖母のいなくなった芦切沢に帰ることはなかった。好雄たち三人の行方もつかめないまま、今日再びこうして訪れるまで十三年の月日が流れたのだった。

私が今日芦切沢に戻ってきたのはすべてあの時の思い出のためだ。水の底に沈む、二度と戻れない夏の日の思い出……。しかしその思い出は、振り返りはしても立ち止まってくよくよするためのものではない。前へ進む励みとなるものだ。

夕暮れの迫るバス停に来た時と同じバスがもう来ていた。まだ余裕があると思っていたのに、いつの間に時間が経っていたのだろう。私はバス停に向かって畦道を走りだした。

走っていると不意にまた、あの時の思い出がフラッシュバックしてくる。

この畦道を駆け抜けた、三人とのあの日の、虫取りの思い出が――――。

でも私は立ち止まらない。

走り続けて飛び乗ると、バスはエンジンのかかる音とともにゆっくりと動き出した。余裕をもって気をつけていたのに、思いのほか時間が経っていたらしい。

この芦切沢に戻ってくることはもうない。坂道も、神社も、石階段も、畦道も、すべて水底に忘れ去られてしまう。しかしあの夏の日の思い出だけは、私の胸の中に大切にしまわれている。

好雄、岬、朔司……、三人は今頃どこでどうしているのだろう……。

元気にしていればいい。ふっと笑みをこぼして、私は思った。
もう会えないのかもしれない。でも、それでもいいじゃないか。
離れ離れになっても、楽しかった思い出を胸に前を向いて進んでいく。それは強がりでもいい。だから、どこかで元気にしていればいい。
私はあの写真をもう一度見ようと、おろしたリュックに手を伸ばした。大切にしまったものだからなかなか出てこない。
四人一緒に写っている一枚だけの写真、おかしいなとリュックのしまいそうなところはすべて手を入れてみるが、どこにいってしまったのか写真は一向に見つからなかった。
きっと、落としてしまったのだ……。
大切にしまったつもりだったのに、写真を村においてきてしまった……。いつかの四人を切り取った、大切な思い出のひとかけらを……。
――――オレが今からとってきてやるよ。
――――雪枝は泣き虫でも弱虫でもないんだ。
――――雪枝ちゃん、また来年ね。
ふと、三人の声が聞こえた気がして、私は後ろの窓から去りゆく村を振り返った。
バスはトンネルに入り、村は次第にその向こうに見えなくなっていった。

最終話（後書き）

水底の坂道、最終話をお届けします。
お読みいただきありがとうございました。素人の書く拙文で、読者の方々のお目を汚すことになりましたでしょうが、読んでくださる方々がいるのはなによりも力になりました。
ありがとうございました。

ｃｅｒｙｅｔｉ

あとがき、新作等はブログにて（新作を連載中）
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｃｅｒｙｅｔｉ／

追記
もし最後まで読んでくださいましたら、
「読んだぞバカ」
だけでもコメントくれると踊って喜びますｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0360p/

水底の坂道

2010年12月28日20時40分発行